

109 「おそれ」

かなり前のことになるが、妻と私、長男（淳）の3人で漢字能力検定試験を受けたことがあった。漢字の読み書き能力を証明するもので、当時この検定試験の社会的評価は高く、受験や就職にも有利とされていた。まだ、日本漢字能力検定協会における不祥事が発覚し、評価が急落する前のことである。

受験の第一の目的は、当時高校生だった長男が検定に合格すること。そして、一つの目標に対し共にがんばることで、親子の間により強い信頼関係が生まれると考えたためだ。

淳と私は2級、妻は準2級を目指して約1ヶ月間テキストと格闘した。やはり、試験を受けるとなるといい加減な勉強ではだめ、難解な漢字、ふり仮名、四文字熟語など繰り返し読み、書きして覚えた。

その中で、私にとって1つだけ、今でも強く記憶に残っていることがある。それは“おそれ”という漢字だ。「おそれ」は多くの場合『恐れ』と書かれる。

第1の意味は「こわがること」、次に「心配・憂い」という意味もある。漢検をきっかけに「心配である」のときの「おそれ」は『^{おそれ}虞』という漢字があることを知った。

この知識で新聞などを注意しながら読むと、「心配・憂い」の意味であっても「恐れ」と書かれる場合が多く気になった。決して間違いではないが、「恐れ」は“おそろしい”という意味あいが強くと違和感がある。そんな中、「心配・憂い」の意味のときは「おそれ」と、ひらがなで表記をしているのもあり、そんな時は「分かっているな」と自分なりに満足した。

今、国語辞典をみると『おそれ』を「心配・憂い」の意味で使うときの漢字は、確かに『虞』とあり、この漢字が「常用漢字」でないためか“かながき”が望ましいと記されている。

漢和辞典でさらに詳しく調べると、『おそれ』には「恐れ」（敵・危険・死をおそれる）以外にも、

「怖れ」（びくびくおそれる）何かに迫られる感じ（恐れに近い）

「畏れ」（神をおそれる）威圧を感じて心がすくむ、うやまう気持ち

「懼れ」（失敗や発覚をおそれる）おどおどする気持ち

「怯れ」（心がおじける）ひるむ気持ち

など、似ているが少しずつニュアンスが異なる漢字があることがわかった。

一方『虞』の第一義は、おもんばかり（予め先のことを考える）次に、おそれる（先のことを考えて心配する、危惧【危虞】する）という意味が続く。そこには「恐怖」という意味はなく、やはり「恐れ」「怖れ」「畏れ」「懼れ」「怯れ」などとは、ニュアンスが違う感じがして気になってしまう。

本日（2021年7月24日）は東京オリンピック開幕の日。毎日新聞一面・主筆の文章－『異形の祭典』を心に刻む－には次のようにあった。パンデミックの中、民意に逆らって強行されたオリンピックに対する新聞社の見解である。以下新聞記事、、、

「国民との対話に背を向けた先に待つものは社会の『分断』かもしれない。それが負の遺産となる恐れを否定できない。」

さて、漢字検定試験は努力の甲斐あって、3人ともめでたく合格。親子そろって喜び合った。どんなことでもいい、挑戦して結果が出れば努力が報われ自信がつく。ところがその数年後、協会の不祥事で「漢字検定」の価値は地に落ちてしまったのである。（2021.07.24）